

医薬品の副作用を調べるデータベースが2018年度に稼働する。厚生労働省が東京大学や北里研究所などから300万人分の患者情報を集め、副作用の発生頻度を把握しやすくする。いまは医療機関や製薬会社の報告に頼っており、必要な情報を集めきれていない面があった。健康被害の減少や副作用の少ない医薬品の開発に役立てる。（医薬品は化学物質ですから、化学物質が投与されると、それを異物と認識するMHCⅡタンパクを作る遺伝子を持っている患者だけが、排除しようとして正しい免疫の反応が現れます。偉い医学者たちはこれを薬に対する過剰反応と言うべきなのに言わないのは不思議ですね、アッハッハ！そのような正常な免疫反応を副作用として患者に現れた種々の副作用の情報や発生頻度を集めたところで、何の意味もないことです。副作用は健康被害でもありませんから、副作用がなぜ出るかというのを誰も理解できていませんから、無駄なことです。このような副作用を出さないためには化学物質である不必要な薬を使わないことが最高ですね、アッハッハ！薬が化学物質である限り、いわゆる副作用と呼ばれる正常な患者の反応が一人たりとも絶対に出ないということはありません。なぜならば全人類の遺伝子のMHCⅡの多様性は無限ですからね。）

厚労省と医薬品の審査業務などを担う医薬品医療機器総合機構（PMDA）がデータベースを作る。17年度中にデータの基準をそろえ、18年度から研究機関や製薬会社に開放する。データベースには当初、300万人の患者の情報を集約する。

大学病院やNTTの病院など全国10拠点23病院が参加し、電子カルテやレセプト（診療報酬明細書）などを集める。病名や使った医薬品、投薬の前後で起きた症状などの情報が対象だ。患者の名前や住所などは除き、個人情報保護する。（こういうデータを集めるだけでも莫大な金を使うことになりますから、お金の無駄遣いです。副作用が出た患者の情報は何も保護する必要はないのです。なぜならば副作用が出た患者の免疫の遺伝子のひとつであるMHCⅡの多様性が優れているということを認めるだけですからね、アッハッハ！）

厚労省は医療機関や製薬会社などに副作用の報告を義務付けている。医師らが気づかない副作用を把握できず、薬を使った患者数も正確に分からない。副作用が起こりにくい薬でも、使う患者が多ければ、高リスクと判定される問題もあった。（薬という化学物質が多数に使われたら、当然それを排除するMHCⅡの遺伝子を持った人が必然的に多くなるので、いわゆる副作用と呼ばれる反応が出る患者が出現するのも当たり前ですから、高リスクとなるのも当たり前ですね、アッハッハ！）

データベースがあれば、同じ病気に使う医薬品同士で、副作用の起きやすさを比べられる。医薬品のリスクをより精緻に見極められるようになる。厚労省が早い段階で注意喚起などの安全対策を講じやすくなる。（副作用の起こりやすさというのは、なぜ副作用が生じるのかを解明しない限り、症状だけの数を比べても何の意味もないですよ。）

同じ病気の患者で、医薬品を使っている人と使っていない人とで影響を比較できるのも大きい。例えば、風邪薬を飲んで皮膚に発疹がでた場合、薬の副作用によるものか病気によるものか判断できるようになる。（同じ化学物質を使っても副作用が出ないのは患者のMHCⅡの違いがあることを示しているのみならず、さらに病気とは異物を排除する戦いに過ぎないわけですから、薬という化学物質が問題であるのか、元の病気の原因が化学物質によるものか、病原体によるものか、ヘルペス8種類によるものかを明確にしない限りは言葉の遊びで終わるだけです。アッハッハ！）

製薬会社にもメリットがある。現在は副作用情報を医薬情報担当者（MR）が医師を訪ねて集める。「人海戦術なので相当のコストがかかる」（外資系製薬企業）のが実態。医療機関からデータを集められれば、作業の手間を省ける。（病気は薬で治すものではなく自分の免疫でしか治せないのも、もともと必要ない薬を売っているだけですから、無駄な薬を出して無駄な免疫の働きをわざわざ刺激して、副作用を出させているわけですから、二重三重で意味のないことを世界中の医薬業界がこぞって邁進している姿は本当に滑稽ですよ。もちろん免疫に関係ない成人病もあるわけですが、そのような病気は全て自分で作った病気ですから、薬を飲ませるのではなくて、検診ではなくて自己責任を持たせる一般医学教育を子供の時からやるべきですよ。）

副作用情報を得やすくなれば、対策も立てやすい。臨床試験でわからない副作用が承認後に発生するケースは多い。早期に察知できれば、被害が出る前に適切な対処が可能だ。厚労省も「企業は研究開発に注力できる」（幹部）と期待する。

副作用の報告件数は増える傾向にある。医薬品の開発競争が進む中、国が監視を強め、企業の法令順守の意識も高まっている。それでも製薬会社の報告漏れはある。情報の精度を高める取り組みが欠かせない。（臨床試験というのはあくまでも症状が出るかどうかを見ているだけであり、副作用がなぜ出るかについては一切調べるわけではないので、臨床試験も何の意味もないのです。「被害が出る前に適切な対処が可能」という言い方も極めておかしいのです。化学物質を入れれば生まれ持った免疫の遺伝子が異物と認識する人がいれば、いわゆる副作用と呼ばれる症状が出るのは当たり前ですから、被害ではなくて正常な反応というべきであって、このような正常な反応を起こさないためには、本当に病気を治せる薬だけを使えば良いのです。それは抗生物質と抗ヘルペス剤と漢方薬ですね。これらの3つの本当の薬は免疫を手助けするだけであり、漢方薬を使えば症状を取る免疫を

抑える薬は絶対に使ってはならないという教育もするべきですね。ところがツムラの漢方薬は9割以上医者が使っているといわれています。と同時に、免疫を抑える薬も使っています。その使い方の言い分は、中国医学の良いところと西洋医学の良いところを融合した、優れた薬の使い方であると強弁します。ところが中国医学の良いところや西洋医学の良いところは一切触れていないのです。現代はアメリカ大統領のトランプが嘘をつきまくっていますから、何が真実であるかということがわからなくなってきたので、現代はポストトルースの時代とか陰謀の時代とかいわれ出しましたが、医薬業界は昔から陰謀の時代だったのでしょいかね???)